江萩名所図会

附録

ル4
3643
7

八江萩名所図画附録

目録

新明倫館　同図

好生館

姥倉堀割　同図

門 ル4
號 3643
巻 7

昭和廿三年
二月二十日
購求

八江萩名所図画附録

木梨恒充　著述
山縣篤藏　補正

新明倫館　弘化三年明倫館御再興嘉永二年正月落成二月十八日聖廟釈典三月二日諸稽古始疆域二丁四方にして囲りに溝渠を作り中央南面に聖廟を立つ観徳門南門あり左に講堂あり継きて學生寮及ひ官吏等の衙局あり右に諸の武藝の稽古場ありて都へて此處を演武場と号す又乾の方に練兵場あり大砲小銃の稽古場ありて操練怠ることなしさて一ヶ月六暇を賜はりて五十の日を休日とす

萩陋屋藏版

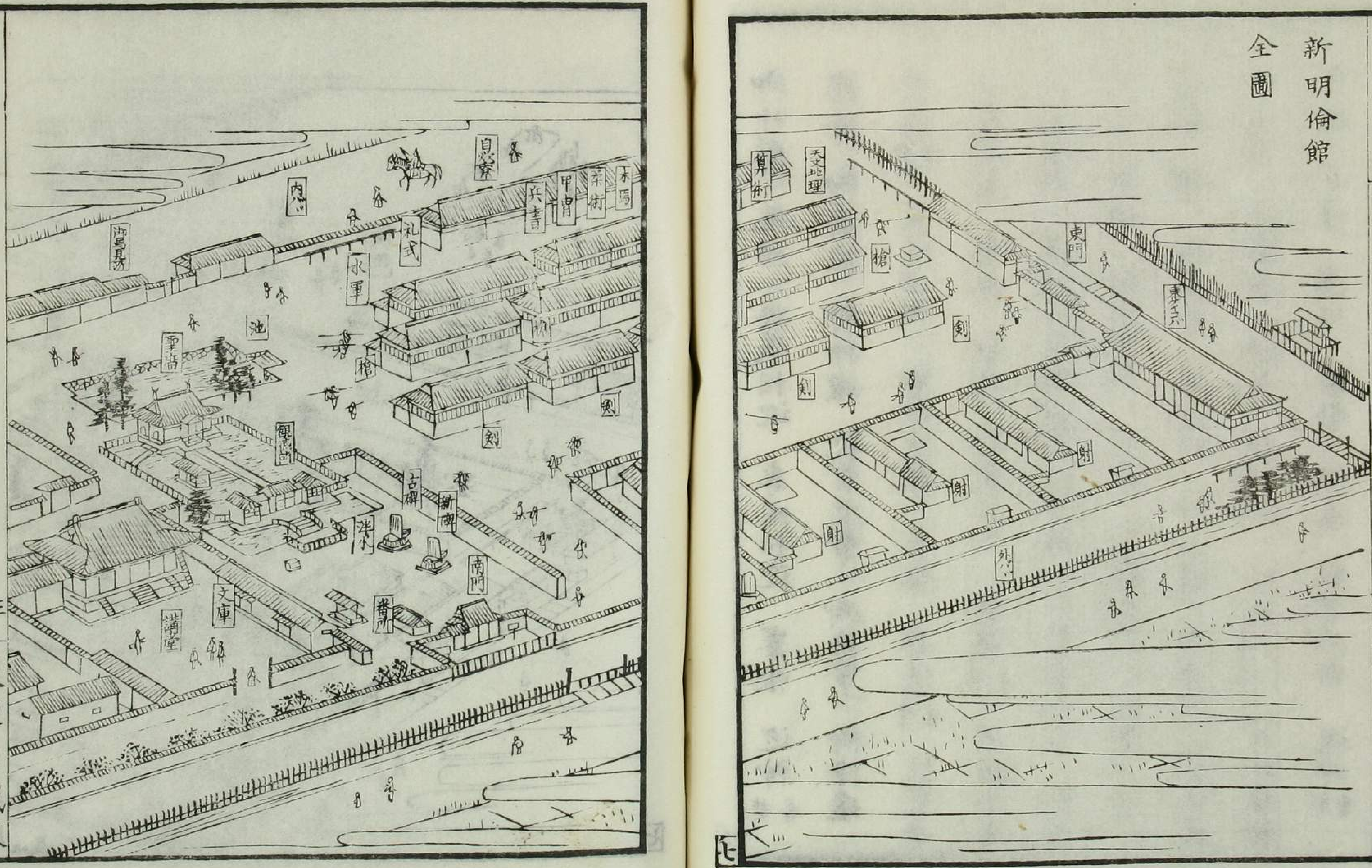
其餘の日ハ朝ハ卯の刻より出て夕ハ申の下刻ニ下宿す実ニ廣大の稽古場ニして文武の諸藝怠惰することなく他藩ニ冠たることを著し

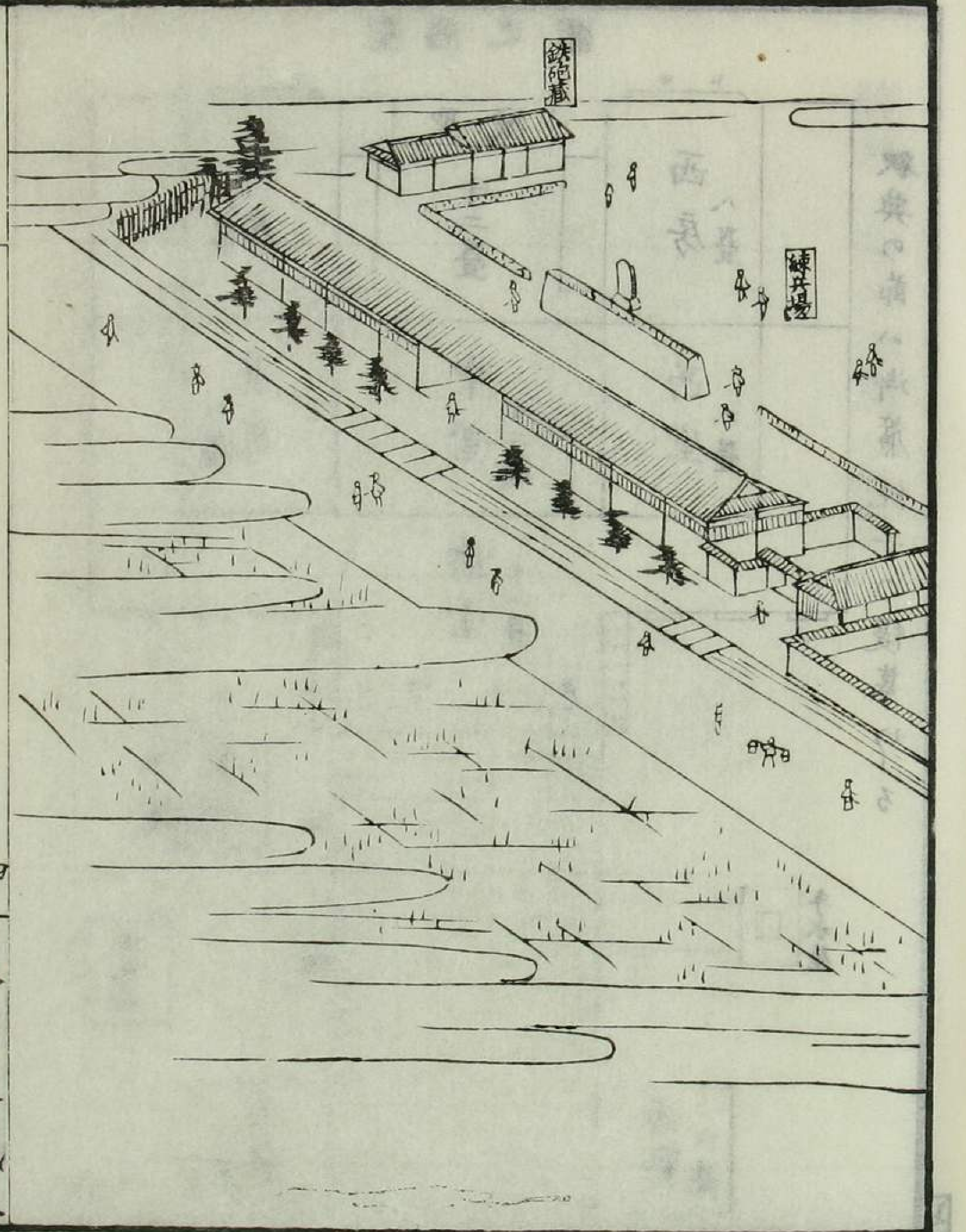
聖廟正壇木主（竪六尺 横三尺） 大聖至成文宣王 （古明倫館より遷座）
右脇木主（竪四尺 横二尺） 袞國復聖公 同 沂國述聖公
左脇木主 同 郕國守聖公 同 鄒國亞聖公
右掛物 程伯子神位 張子神位 朱子神位
左掛物 周子神位 程叔子神位 召子神位

釋典御次第

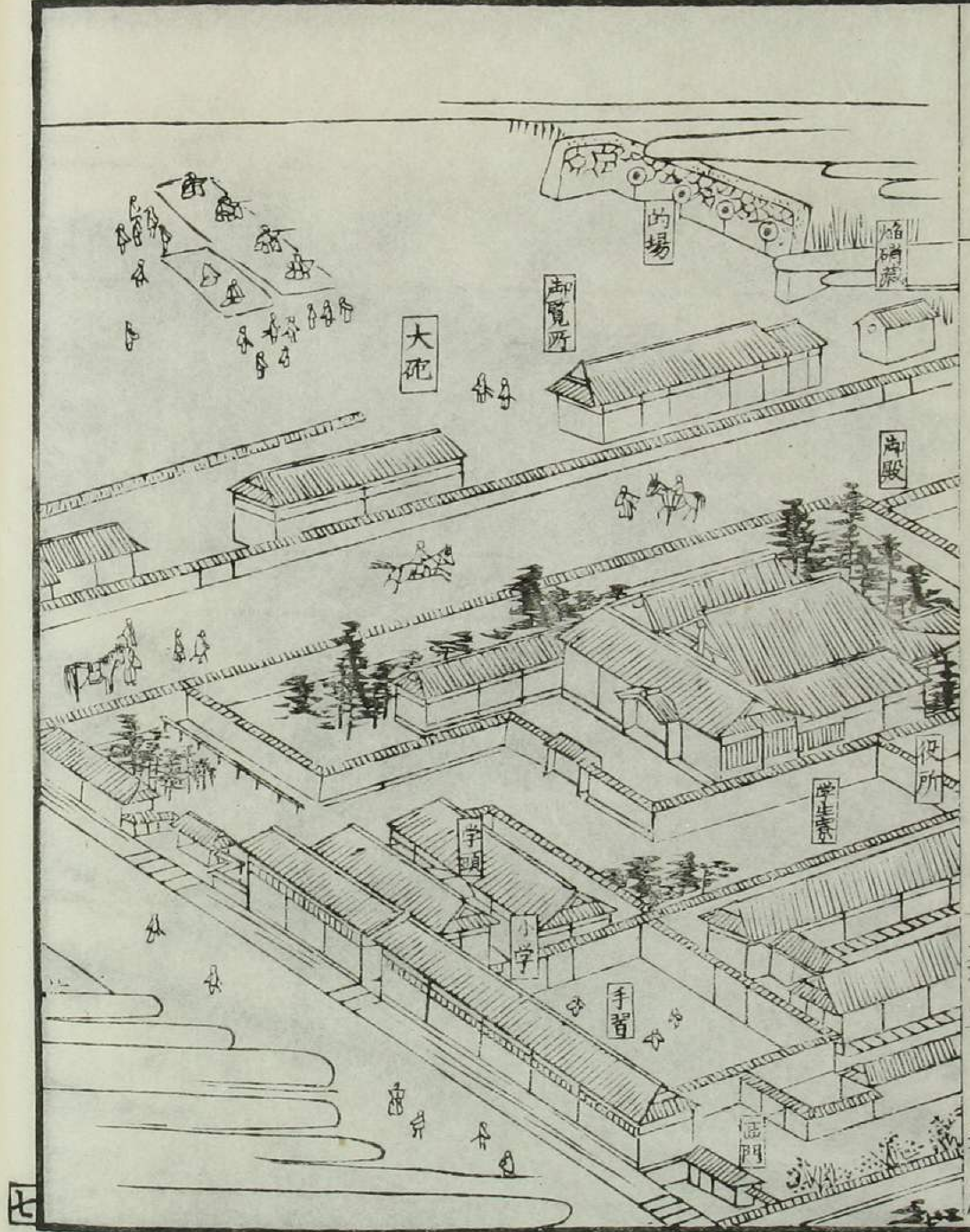
御升殿 就座 典儀相迎 專理相迎 褰帳 迎神（焚香）
總拜 御盥洗 御升壇 祝官進幣 御奠幣 御降壇
典儀（焚香） 奠供（解斂） 齋郎進饌 奏樂 典儀（焚香） 初獻介者
初獻盥洗 奏樂 祝文 初獻北面 典儀（焚香） 亞獻介者
亞獻盥洗 奏樂 亞獻北面 典儀（焚香） 終獻介者 終獻
盥洗 奏樂 終獻北面 受胙 初獻北面 初獻介者
初獻 拜 御香拜 御退殿 御仕構 御升殿 胙御頂戴
御目見 御歸城 總拜 典儀（焚香） 徹供（解斂） 齋郎徹饌
奏樂 見臺 講師 徹幣 望瘞 獻官北面 送神（焚香）

新明倫館全圖



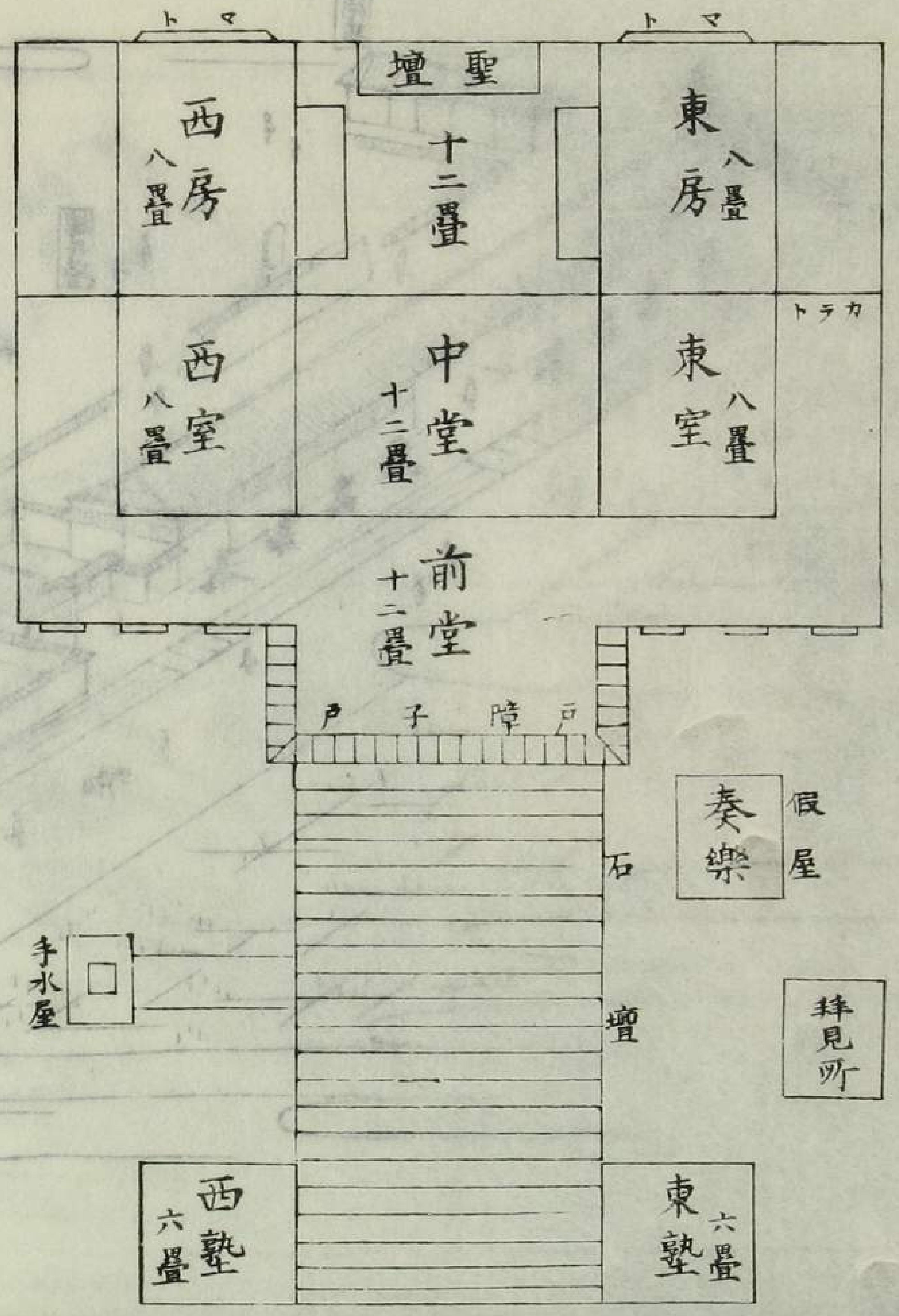


大西屋蔵版



聖廟之圖

釈典の節ハ御簾純子の幔幕かゝる



總拜　垂帳徹燭　起坐

佪心

聖廟ヱ掲る
所の額
有栖川幟仁親王
真跡

講堂

講堂ヱ掲る
所の額
山縣真平筆

本門并講堂式臺の額ハ古館の分を用ひられたり
講堂ヱ於てハ一ヶ月十二日即ち二三七八の日講釈餘日ハ十
三經より詩文ヱいたるまて會講怠ることなし
堂中ヱハ諸賛古捉享保度古館の分を掲け又新たヱ二面

をかゝけられたり又正面にハ別に學生掟の額を掲く功令額といふ

學校之設達才成徳欲上焉以供國家之用下焉以使有所矜式其若斯
也則學問果有益於人歟抑亦芻狗也歟其有裨風教歟抑未歟入將於
我乎嘗焉夫讀書學文者將以明經通史長養才徳待用於他日不則學
雖博乎文雖富乎亦無復所貴矣諸生遊館下三年為一期歴得千有餘
日白駒之過可立而竢朝夕孜々務就功令猶且恐不及焉一日之中遊
惰竟時俄失日半三年不下二三百日古者女功一月得四十五日加之
以夜之半也勤惰之分有如是者鄙生以一日之長叨居諸生之先今依
故祭酒倉君所創少增損定功令凡事无統領責無所歸諸舎推長者一
人為舎長進退作息皆聽命而舎長聽命都講都講聽命學長學長聽命
先師之靈又立直日一人諸生輪次當直以董學務其制條左具鑿照勿
違

功令

一卯時聞板而興盥漱結束升堂温讀經書
一辰時聞板下堂入厨會食々畢入舎喫茶
一巳時聞板就業各於其舎若講日則聞板上堂講畢入舎各就其業
一未時聞板入厨會食々畢入舎喫茶除會業外遊息從心若欲出校弁
事者告館長延出館長不在則告都講及酉時必歸若以事留外廢夜
業者先具事由請館長所許乃得出去
一酉時聞板就業
一亥時聞板罷業就安若欲卒業者聽及子時不許達旦
一直日生一名諸生輪次當直董督當日學務凡業席見設期會板報賓
客應酬烟茶諸項皆在所管時々循視列舎警勅廢業
一功令常業外各自別受私業一部臨時請業於館長録上都講舎板子
既已卒業更轉他書亦如之別具一冊逐次載録毎歳六月十二月比

較業書冊子多少以視殿最
一非父母尊長召呼他有緊要事故不得輙出校門出則詢都講及直日生告學長而後出帰則面學長若都講直日生
元文三年戊午二月朔　　學長

演武場ニハ射術場三所粟屋山縣岩崎の師家三軒馬術場二所藏田折下内藤仙波石黒の師家五軒劍術場四所内藤馬来平岡北川の師家四軒鎗術場三所岡部横地小幡の師家三軒其外大砲師家五軒兵學同三軒禮式同二軒水軍同一軒天文地理一軒甲冑早着同一軒算術柔術無念流劍術等各稽古場并ニ師家ありて日々稽古断間なし又東ニ當り一宇あり他

國の劍鎗修行者試合をなす所とす又遠郡土着の者入舍自炊の場所あり練兵場ニハ小銃神器陣の調練大砲周發臺の稽古日々怠ることなし

講堂の北練兵場の南ニ於て公館を設け藩公時々御出ありて講釋を聴きたまひ或ハ武場ニ臨ませられ親しく演武を御覧ありて文武の御奨励遺す所なし

重建明倫館記

天下之事有守舊而不可易者有随時而可變者其可變者而不變則因循苟且萎薾不振其不可易者而易之則舊章頽壊百弊随之

故如綱常之大經國家之重典固當萬世守之而不易焉至制度文
為時勢或有窒礙者又不可不一新而變通之矣昔　泰桓公之創
明倫館也蓋將大興學以張治化乃量度時宜相地於城門之内以
經營焉而人倫教化之道立而文武造士之法備矣爾來迄今百三
十年列世相承継志述事文武講習之士日增月多昔之所經營今
也狹隘殆不能容非宏其規摸而增其式廓則不得適時勢之宜矣
及　今侯立而丕承遺緒宵旰匪懈思以紹明前烈乃命宰臣曰欲
張其末者必厚其本欲遠其流者必浚其源學校者政治之本教化
之源治國之所宜先也而　先公創建規摸既備矣今又廓而宏之
豈非継述之道也耶汝其與有司議之於是執政與有司胥謀乃就
府下中央之地而別擇寛敞之區重營其宮肇工於弘化丙午今春
告成聖廟居中殿堂巍然門塾修整泮水環之結構之壯輪奐之美

於舊有加焉講堂在其西庖廚學舍相次而西東則為演武之場北則
為練兵之區小學有堂肆礼有台天文書算之場騎射調馬之埒亦
盡具焉廟後鑿池蓄水可以習水騎講堂之北設公館為　公臨學
而養老試士之所而四外周以溝塹大門在南以正方面於是學校
之制煥然大備矣而明倫之名不易其舊者何也蓋　先公建學文
武造士其要以明人倫為重也文武之学不本諸倫理則文流於浮
華武陥於暴厲不足以造士矣故凡入学者先以明人倫為基本而
講究文藝精練武事資之以師友勉之以歳月以成其德達其材然
後濟々多士可以賛治裨政而宣風化之美矣糾々武夫可以衛君
禦寇而為邦家之干城矣是固所以建學造士之本意而治化之所
以由行也且建學造士豈獨守其封疆而已哉所以為國家之藩屏
也而其要帰於明人倫則其名館之義不亦至重乎是所謂守舊而

不可易者也若夫堂舍之位置向背學政之條令節目當隨時量宜而相增損焉然則　今侯之圖重建乃所以悛其可變者而守其不可易者也館成命臣禎為之記禎以承乏學職不得辞謹叙重建之由以繼先臣孝孺之所記云

嘉永二年歳次己酉春三月　　館祭酒山縣禎文祥謹撰

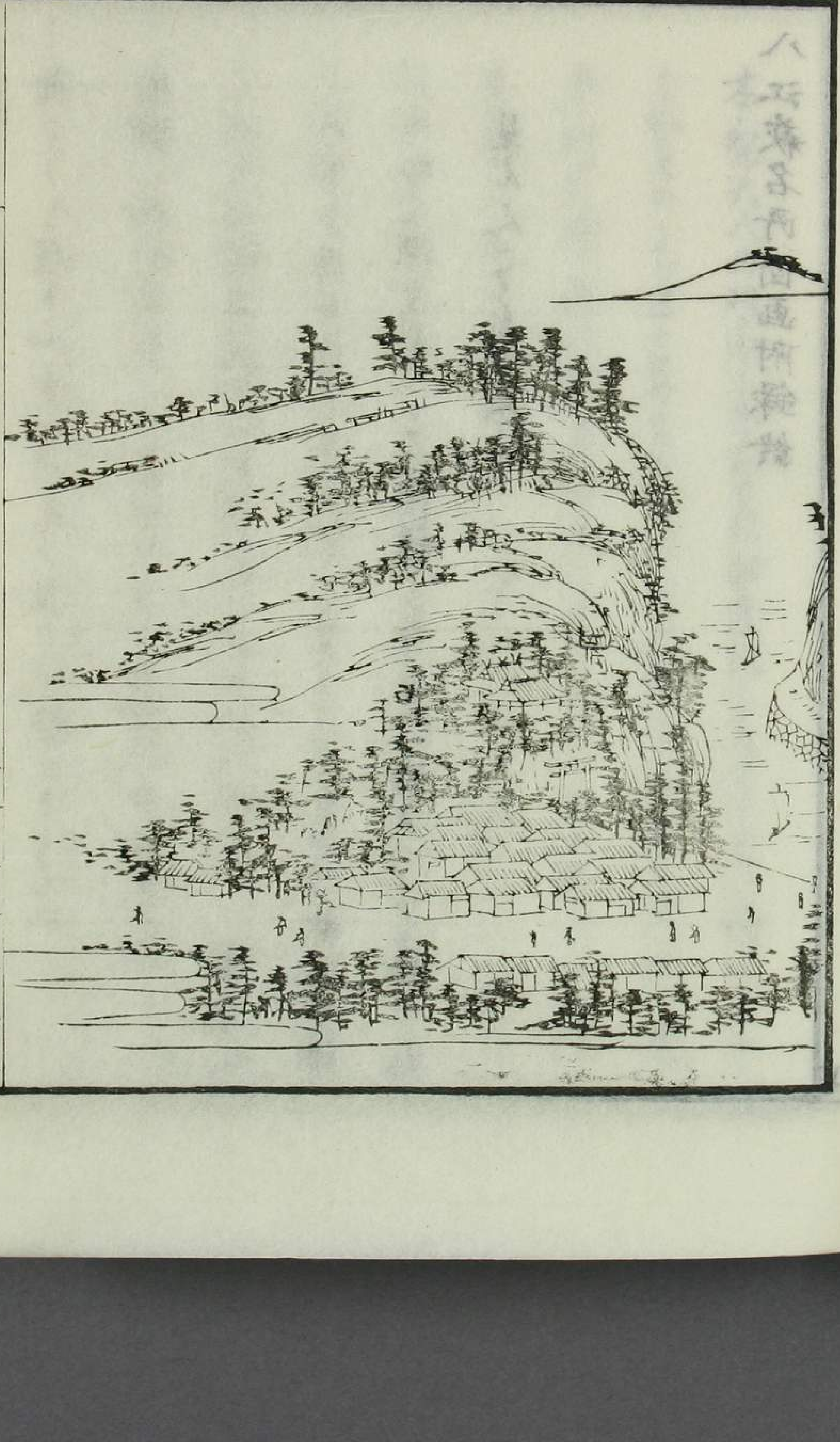
館内總地坪數壹万五千百八十四坪餘

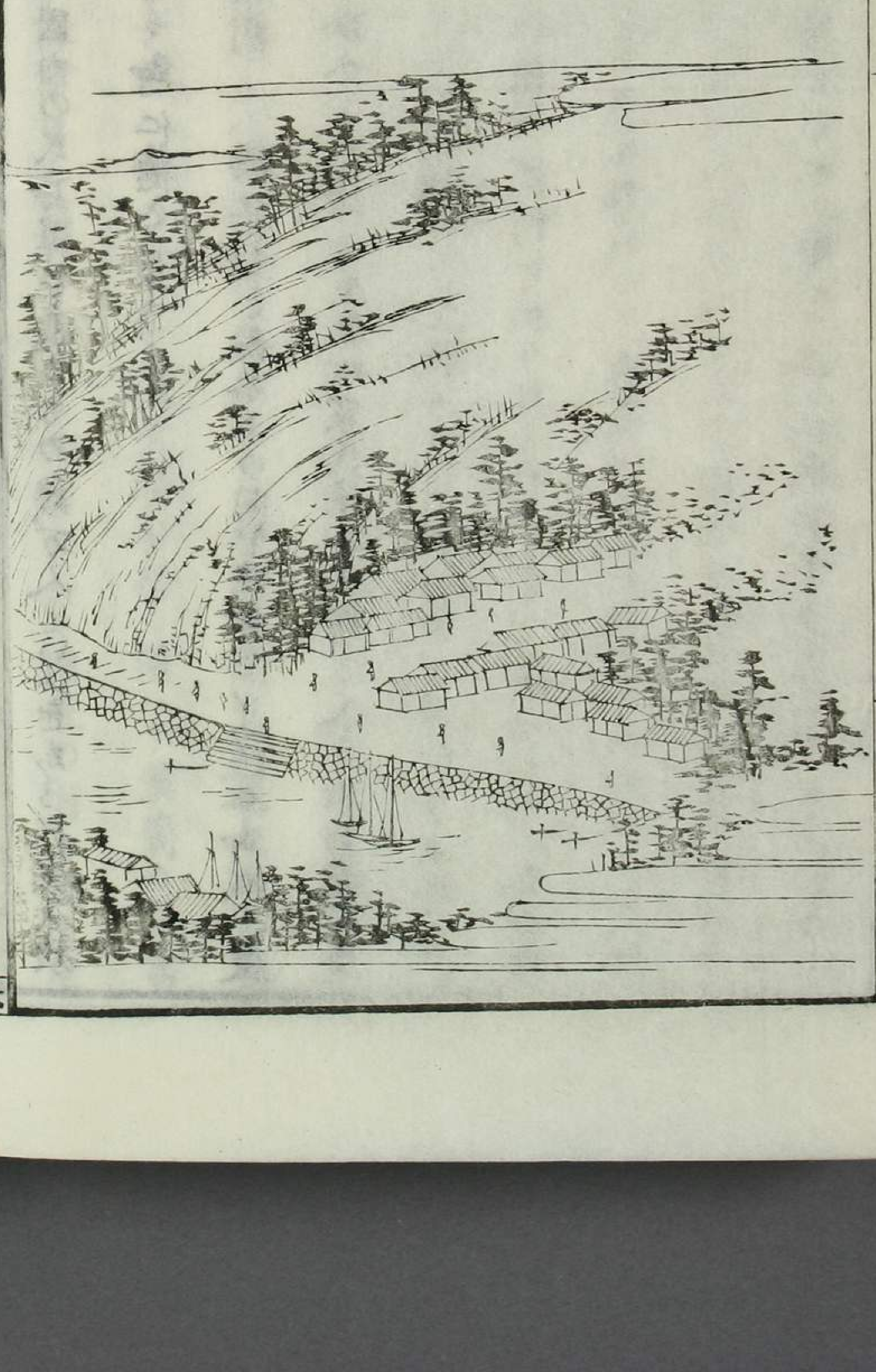
當職　益田刑部　　土木專務兼藏元両人中谷市左衛門

好生館　八丁御殿の東にあり嘉永年間の創建に係り醫家の子弟入學の所とす講堂學舍悉く備はり漢蘭の醫書講釈課業日ゝ怠ることなし又一ヶ月六日種痘の術を施させ

られ國内の民其澤を被るもの幾万人といふをしらに実に廣大なる御仁德といふへし

姥倉堀割　鶴江臺と長添山の間を姥倉といふ近年御城下度ゝの洪水にて諸士屋敷町家民屋共水押し入り田畠損害多くして上下困難せるを歎かせられ此所を堀割り水勢を殺き舟楫の便利を開かせられるなり嘉永六年の春鍬始安政二年の夏落成せり總長四百拾九間幅十五間役夫大凡そ三十壹万人船役二万六千餘艘日數九百餘日を費せり古来稀なる大工事にして以来洪水の患ひ更にこれなく





姥倉堀割之圖

海よりも深き御遺徳のほど誰か感戴せざらんや
當職　毛利筑前　專務御用掛兼撿使布施虎之助
此明倫館再興好生館新設姥倉堀割の如きハ　慶親公
の厚き恩召によりて成就しけるものにてその教化徳澤
のほど深かりしことに附録となして一冊につゞり畢りぬ
見ん人こゝろすべし

江萩名所図画附録終

本桀大人の世にましておのれ壮年にしてはじめて読まむとせし
しかそのゝち三十年あまりは月日経るまゝ世の中大に変
り行て今はいづ方にあるやとおもひつゝゐたりしに思ひかけず
去年の春本桀皓如にあひてそのふみのゆくへをと
ひしに父の遺書なれば久しく匣底に秘めおかれきなり
とて取り出されたれば覚えず掌をうちたち
よろこびかりに借り持帰りて巻ひらき繙きて読見る
に地形のさまは大城はじめ人家をはじめ山川原野の景
勝神祠佛堂の壮巌より四季乃遊覧士女の風俗に

いにしへをしのふたかきしれわきて古文書画扁額
碑文なとは原のまゝを摸てさし入れしその地
まのあたりてまれあるりし所なとのさしたるし
むかしは其業ありそめて大人なりしもまたら
年かはの学術のまゝにて其心得ちえきとしろし少
なからすかゝる目録のことあるにて其文のよしあしる
又其国の位置沿革をわかち写し出ねその形を
ありて其切いまた綴られたるはいと遺恨のことなれ
これはなりおもんはかるに業なから大人の志をつきて

采さんものならて古老に問ひ諸書を参閲し
あまたの月日を費やし校正増補なしその頃
漸くうまれ畢ぬるからなり星霜月移
りめくらしの事あつて稿をなさぬなるを
維新は御代となりてや諸侯のお出さへ朝廷に
うつりまつりたれはこと前事にはせまる古き大
城はちなきと其をおほくあるなさまさ地をて新宿
の業となりて世々の繁華をうつしいとものから
これ人はらくはかりかるまる利今はわたる数

年を経ぬれば著をあらはせる人さへ絶えはてゝ其跡
だに語りあふものゝ中の流派にも礼なきのみならず
あらぬ武林私人のこゝろしをきこゆる集とは何某の浦
人の採りあつめたる藻しほ草とともにいつく
隠れぬものになむ

明治二十五年の水無月廿日　山縣篤蔵しるしぬ

明治廿五年十月三十日印刷
同　廿五年十一月一日出版　版權所有

著述者　故　木梨恒充

相續者　木梨晧
群馬縣西群馬郡飯塚村百三十四番地

補正兼發行者　山縣篤藏
東京赤阪區赤坂新町五丁目七番地

印刷兼發賣者　吉川半七
東京京橋區南傳馬町一丁目十二番地